

# 本文の読解から 自己表現へ(1)

— 行間を問う —

立川 研一 Tatsukawa Kenichi (大分県九重町立野上中学校)

## 1. 読解力を高める発問

本稿では、生徒の「読解力」を高めるため、また「自己表現力」へとつなげていくために、教科書本文をどのように活用していくかについて、筆者のこれまでの実践例を3回にわたって述べていく。1回目はまず、教科書本文の「行間を問う」ということについて考える。

18年前、新卒3年目の私は、平成2年度版の *NEW CROWN ENGLISH SERIES* (以下 *NC BOOK 1* の Lesson 10 § 3 を題材に、以下のよ

うな授業を行った。  
読者の皆さんは、この本文の「読解」のため、どのような活動を仕組み、どのような発問を行うだろうか？

Lanmei: Your dog is barking, Jiro. Is he saying something?
Jiro: Yes, he is. He's saying, "Food, please."
Lanmei: Listen! He's barking again. Is he still saying, "Food, please"?
Jiro: No. He's saying, "Fruit, please."
Lanmei: Oh! You understand his language very well.
Jiro: Yes. We're good friends.

(平成2年度版 *NC BOOK 1* p.58)

私は、まず「Jiroは犬に何回エサをやりましたか?」と問い、班で話し合わせた。次に、「どの表現、単語からそれがわかりますか?」と問い、本文の細かい表現にまで目を向けさせるようにした。

生徒からは「againという単語から2回エサを与えている」「またほえている」と言っているので、一回目にほえたときにエサはもらってない」「'good friends' というからには、優しく接したはずなの

でエサはあげている」など、様々な発想で活発な意見交換ができた。この結果、自然に本文の読みが深まり、生徒は十分に内容を理解することができた。

最後に私が、「ALTの先生は、『たぶん2回だと思う』と言ってたよ」と告げると、生徒は納得し、逐語訳を求める声は出なかった。

この授業をきっかけに、私は本文理解のための発問の仕方にこだわるようになった。生徒が本文内容により興味を持ち、より意欲的に読み取ろうとする、「よい発問」のあり方を常に考えるようになった。

大分大学の柳井智彦教授はその著書の中で、本文の読解は「知覚語で問え」と述べている。例えば「本文からどのような音が聞こえますか?」「本文から見えてくる色は何色ですか?」など「五感」を問うのである。(『英語授業の上達法』明治図書、1990)

本文には直接述べられていないことをあえて問うことで、生徒は「行間」を読み取ろうと真剣になる。その結果、自然に本文の小さな表現にも注意するようになり、内容の理解がより深まるのである。

この示唆をもとに、私は読解力を高める方法として「行間を問う」発問を多く用いてきたし、現在もそう努力している。以下にその具体的な方法をいくつか述べていく。

## 2. 五感を問う

現行版 *NC BOOK 1* の Lesson 6 では、耳の不自由な松本さんと、彼女の生活を支える聴導犬ミオが登場する。松本さんの日常が語られる § 1 では、私は「この本文からどんな音が聞こえますか?」と問い、生徒に話し合わせた。

生徒からは、「犬が走る足音」「ドアのベルの音」「外から松本さんと呼ぶ人の声」「犬のほえる声」「本のページをめくる音」など様々な意見が出た。写真から想像した意見も含まれているが、すべてを共感的

に受け止めながら、やはり「どの表現からそう思いましたか?」とたずねていく。1つ1つの意見の根拠を確認することで、生徒たちは本文の単語や表現に立ち返っていった。

また、「この本文に書かれていないことで、ミオが松本さんに教える音にはどんなものがありますか?」とたずねると、「お湯が沸く音」「救急車や消防車のサイレンの音」「(不審者などの) あやしい声や音」など、様々な意見が出され、それらの音を聞くことのできない松本さんの生活や、ミオの仕事ぶりなどを想像する手助けとすることができた。

### 3. 性格・感情を問う

平成2年度版 *NC BOOK 3 Lesson 5* の“A Present For You”は、O. Henryの短編“The Gift of the Magi”が原作であり、教科書もいわゆる hard-boiled スタイルで書かれていた。登場人物の性格や感情は直接的な表現では一切語られず、情景描写や行動から読み取るしかない。場面から読み取れる色や景色、表情などを問い、登場人物の心理を想像させるのに適した題材であり、現在でも発展学習としてときどき生徒に読ませている。

生徒は、Della が髪を売りに行った店の女店主の台詞の短さから、その「冷淡な性格」を読み取った。例えば Della の “Could you please buy my hair?” といういねいに問いかけに対する、“I buy hair.”, “Take off your hat.”, “Twenty dollars.” などの台詞である。

また、Jim と Della のクリスマスプレゼントの交換の場面では、Jim がプレゼントを直接手渡さずにテーブルにおいたことや、Della の「そんな風に私を見ないで」という台詞などから、生徒は Jim の驚きや落胆を感じ取っていた。

こうした格調高く、読解の価値が高い文学作品が現行の教科書で数少なくなっているのは、個人的には残念なことだと考えている。

現行版 *NC BOOK 2* の Let's Read 1 “A Pot of Poison”では、An, Chin, Kan の3人の小坊主それぞれの「性格」を本文の台詞から班ごとに読み取らせた。An はおっちょこちょい、Chin は活発でいたずら者、Kan は物語のナレーター役も兼

ねており、状況を説明する台詞が多いため、冷静で沈着なイメージがある。性格を想像させることで、台詞の言い回しを深く読もうとする姿勢が見られ、また音読の際にも性格を意識した読み方を工夫することができた。グループ発表で、Kan の “I can feel the poison. I'm dying.” という台詞を「冷静沈着」に読むところでは、笑いも起きた。

現行版 *NC BOOK 2 Lesson 4 § 1* は、Ken が Emma を「アイヌ文化フェスティバル」に誘うところから始まる。私はここでは、「Emma は、Ken の誘いに対して、乗り気ですか、それともそうではありませんか?」とたずねた。

Ken の “Are you free after school?” に対して Emma は直ちに “Yes.” とは答えず、“Maybe. Why?” とたずね返していること、あるいは、“Will it be fun?” と聞いているところなどから、生徒は「最初は Emma はそんなに乗り気ではなかった」ことを読み取った。しかし、ポスターがチラシを見て、「コンサートも行われる」ということに気づいた Emma は、「乗り気」に変わっている。(“Look.” という台詞からわかる。) 生徒が2人のデート(?)の先行きを心配したのはいうまでもない。

ちなみに、これに続く § 2 の内容から、「Ken はアイヌ文化フェスティバルに Emma は誘ったが Ratna は誘っていない」ということもわかる。これに気づき、指摘してくれたのは生徒の方である。

### 4. 述べられていない行動や状況を問う

冒頭で述べた「犬に何回エサをやりましたか?」という発問もこれに当たる。

現行版 *NC BOOK 1* の Lesson 4 § 2 では、私は「この本文に抜けている台詞は何ですか?」と問うた。

Ken : Do you see any birds?
Emma : Yes, I do.
Ken : How many birds do you see?
Emma : Just a minute. I see six birds.
Ken : I see some plastic bags too.
Emma : Oh, dear.
(平成18年度版 <i>NC BOOK 1</i> p.37)

この Lesson では、§ 1 で人にものを渡す際の「Here you are.」が初出である。続く § 2 では、Emma が Ken に双眼鏡を手渡していることは（挿絵等から）明らかなのに、この表現が本文には出てこない。本文中で登場人物がどのような動作や行動をしているかを想像させることで、「Here you are.」を用いる必然性を感じさせようと考えた。

班で話し合わせた結果、生徒は上記の空白の行の部分に、Emma の「Here you are.」という台詞が欠けていることに気づくことができた。また、同時にそれに対する Ken の「Thank you.」もあるべきだという意見もあり、それ以降はこの 2 つの台詞をつけ加えて音読練習を行った。

NC BOOK 1 の Do It Talk 4 では、時刻を問う表現の学習が主眼である。一通り状況を確認したあとで、「Paul は本当に待ち合わせ時間に遅れたんでしょうか?」と、少し視点を変える質問を行った。

Paul : Oh, Kumi. I'm late. Sorry.
Kumi : That's OK.
Paul : What time is it now?
Kumi : It's three o'clock.
Paul : What time does the movie start?
Kumi : At 3:15. Let's go.

(平成 18 年度版 NC BOOK 1 p.64)

生徒の意見は、「本人が「I'm late. Sorry.」と認めているんだから遅れている」と「Kumi が「It's three o'clock. (ちょうど 3 時)」と言っているんだから、たぶん待ち合わせびったりで、遅れていない」の 2 つに分かれた。

そこで次の発問である。「もし Paul が時間に遅れていないとしたら、なぜ最初に Kumi に謝ったのでしょうか?」とたずねると、「Kumi に時刻をたずねているので、時計は持っていなかったはず。時間がわからなかったから謝った」「遅れたかどうかわからないけど、Kumi が先にそこにいたのでまず謝った」などという意見が出た。

これらの意見から、最終的に「Paul は時計を持っていなかったの、遅れたかどうかはわからない。時刻に遅れたからではなく、Kumi が先に待ち合わせ場所にいたので、待ち合わせのマナーとして謝っ

たのだろう」という結論に至った。つまり Paul は「遅れていない」可能性が高いのである。小さなことではあるが、本文の状況を詳しく想像したり、マナーについて考えるきっかけとすることができた。

## 5. 単語や文法から意味を問う

1 年生の本文や詩など、短い文章表現のときこそ、1 つ 1 つの語に込められた気持ちは多く、重い。NC BOOK 1 Let's Read 1 の「What Do You Treasure?」の詩では、まず「Eve さんの宝物の「山」とは、どんな山ですか」と問うことで、第 1 連の「I treasure the mountains.」に注目させた。

定冠詞 the がついていることから、一般的な山ではなく、彼女の故郷、カナダの山であることが読み取れる。また複数形の -s がついているので、当然どこか 1 つの山ではなく、「山々」だということもわかる。彼女の宝物は単なる「山」という訳では収まらない、「カナダの大自然」だろうということになった。

以上のことを考えさせたあとに、今度は「スリランカの Chakila さんの宝物の木はどんな木ですか?」と問うた。「The tree is her treasure.」という表現で、tree が単数形であること、The がついていることなどから、生徒たちは、「彼女にとって特別な 1 本の木」が宝物なのだろうと気づくことができた。また、「そう考えると彼女の書いた絵の中の木が特別なものに見える」と言った生徒の言葉にも豊かな感性が感じられた。

## 6. おわりに

教科書全ての Lesson のすべての本文で、こうした発問を考え、実践するのは実質難しい。しかし、だからこそ私は、「小さな手がかり」からその場の状況が想像できるような本文に出会ったら、「しめた!」と思う。そして、実際に生徒がその「手がかり」を元に本文の読みを深めてくれたときは、大きな手応えを感じる。

こうした実践の積み重ねにより、生徒は英文の小さな表現にまで気を配るようになり、読解力が高まっていくのではないかと考えている。今後とも、生徒とともに「行間を読む」読解活動に取り組んでいきたい。